

特集 新宿青春グラフィティ

「新宿文化」という磁場

文・亀和田武 撮影・言美歩 Text by Takeshi Kanewada Photograph by Ayumu Gombi

SPECIAL FEATURE
SHINJUKU
GRAFFITI
in memories



いわゆる団塊の世代といわれる人々が「わが青春」を語るとき、その舞台として必ずといっていいほど新宿が登場する。1960年代から70年代、新宿の街はジャズ喫茶、アングラ芝居、ATG映画、サイケデリックといったカウンターカルチャーを求める多くの若者の熱気に包まれていた。だが、新宿の街を語る文化はそれだけではない。「中村屋」でカレーを食べ、「末廣亭」で落語を楽しむ、「らんぶる」でコーヒを飲みながらクラシック音楽に親しむ。

これもまた、新宿の文化である。映画人や演劇人、小説家に詩人、そして多くの若者をひきつけた新宿にはどのような磁場があったのか。作家・亀和田武さんも、ある時期新宿となじみをもった一人。亀和田さんが体験したあのころを訪ねて新宿を歩いてみることにした。新宿という街の二つの文脈が見えてくるかもしれない。

※料金表示は2014年3月末までの価格です。



花園神社

古来より新宿の総鎮守として、内藤新宿における最も重要な位置を占めてきた神社で、新宿に暮らす人々の営み、新宿の街を見守り続けている。境内の銀杏の神木が300年以上の樹齢を越えていると推定されることから、神社がどれだけの星霜を重ねているかは推して知るべし。現在の社殿は1965年に造営されたもので、同一本殿内には大鳥神社、雷電稲荷神社が合祀されている。毎年11月の酉の日には、開運出世、財福招来を祈願する人々が、新宿のみならず区外からも訪れ、数十万人の賑わいを見せる。また、花園神社は演劇界においても縁の深い場所で、1967年に唐十郎が主宰する劇団状況劇場の赤テントが花園神社境内に張られ、日本の現代演劇の方向を変えた出来事として演劇史に刻まれる。
〔住〕新宿区新宿5-17-3 〔問〕03-3209-5265・4586



名曲・珈琲 新宿 らんぶる

1950年に現在の中央通りで開店後、55年からは現在の地で営業。建物は建て替えられているが、椅子やテーブルは昔のままである。〈らんぶる〉とはフランス語で「琥珀」の意味だと3代目に当る重光康宏さんが教えてくれた。名曲喫茶ということで、以前は私語厳禁で、席もスピーカーに向うように並べられていたが、今の時代は音楽も個人で楽しむ時代、現在のスタイルとなった。入口の木彫りの看板は、常連客からの贈り物だ。当時学生だったという年配の人たちが、今でも通っている。戦後の新宿文化の面影がここには残っているからだろう。フレンドコーヒー550円、クリームソーダ650円、琥珀セット(トースト・サラダ・ヨーグルト付)750円、ピザトーストセット900円、ケーキセット900円、ピラフセット900円など昭和の喫茶店のメニューがどこか新鮮に感じられた。
〔住〕新宿区新宿3-31-3 〔問〕03-3352-3361 〔営〕9:30~22:30L.O. 〔休〕無休



新宿の巨大化の第一歩は ステーションビルの誕生から

私の新宿。こう書いたときに微かな違和感を覚えた。どこか違う。何かが引かかる。

もう一度私の新宿と書いてみて、むずむず落ち着かない理由がわかった。

私の、こう記したときの、ナルシズムが恥ずかしかつたのだ。「私の」と書いたとき、すでに意識のベクトルは、否応なく過去に向かっている。その後ろ向きに自己愛が、もう一人の私の目に(なんか俺って、格好悪いな)と映って、他人に気づかれぬ程度だが、私の頬をポツと赤らめさせたのだ。

私の新宿は、現在進行形である。東京の西郊に住んでいることもあって、都心に出かける頻度はめっきり減ったが、それでも月に何度かは中央線に乗って、東を目指す。どこへ。

新宿である。そうか、新宿か。十代のとき、毎日のように通いつめた街に、もう一度、私は戻ってきたのか。

いま新宿で、もつともひんぱんに足を踏み入れる場所は新宿五丁目の界わいだろうか。いまはない新宿厚生年金会館の裏手、医大通りの一帯だ。いまでは死語となった文壇バーが、五丁目の界わいでは、現役感ばりばりで、いまもというか、いまだからこそそのスピード感で営業している。

近くには居心地のいい寿司屋もある。

ここも肩の凝らない店でね、リーズナブルな店だから、腹いっぱい寿司を食べ、店の兄ちゃんに旬の魚の話や、近所の街情報を聞いているうちに、夜中を過ぎてしまう。なんだろうね、この心地よさは。年をとるのも、悪くないだろう。若いころは知らなかったエリアを、嬉々としてうろつきまわる。徘徊老人に怖いものなした。

怖いものだらけだった、少年時代の新宿をそろそろ思い出してみようか。

調子が乗ってきたから、私の新宿は、と書くよ。私の新宿は、やはり紀伊國屋書店だ。中学生のころから紀伊國屋には通っていた。

紀伊國屋は、文人社長の田辺茂一という酔っ払いの爺さんが魅力的だった。自身も味のあるエッセイを書き、作家との付き合い、面倒見もよくて、六〇年代の大橋巨泉、藤本義一が司会した深夜番組「LPM」にも、ときおりペロペロに酔っ払って出演し、放言を乱発していた。

私が高校に入学した一九六四年、紀伊國屋書店は、新宿通りに面した本店ビルを改築する。紀伊國屋書店は、洗練された建築デザインで、六〇年代半ばの、新宿におけるランドマークとなった。

東京五輪が開催され、東海道新幹線が開通した六四年、新宿駅の乗降客は、あつと驚く視線と歩行の変化を体験した。新宿ステーションビルの開業だ。全国初の国鉄(現JR)ターミナル駅に隣接された大型商業ビルだ。

